

このレコードについて

このCDは、1941—1942年頃に、国際交流基金の前身である国際文化振興会によって、おもに外国に日本の音楽を紹介するために発行された非売品の10インチSPレコード『日本音楽集 Album of Japanese Music』の復刻である。国際文化振興会(KBS)は、日本と海外の文化交流を目的に、昭和9(1934)年、外務省・文部省下に設立された財団法人である。1972年に、国際交流基金へと発展的に解消した。おもな活動は、講演会、演奏会などの催し、学者、芸術家など人物の交流、出版物、写真、映画、音盤などの資料の作成と寄贈、会館、図書館等の文化施設設営などであった。日本音楽のレコード制作は、この「資料の作成」の一貫として行なわれた。

国際文化振興会発行の機関誌『国際文化』16号(昭和16年10月)によれば、レコードの制作は音楽学者・田邊尚雄、町田嘉章、音声学者・颯田琴次、音楽評論家・佐藤謙三、東京放送局国際部長・頼母木眞六、KBS常務理事・黒田清、といった人々が携わり、録音は放送協会の全面的な協力のもとに行われた。レコードの制作は昭和14(1939)年7月ごろから選曲等が始まり、昭和16(1941)年の10月には選曲案が完成した。しかし、昭和17(1942)年6月26日づけ国際文化振興会の「昭和16年度事業概況」によれば、録音が終了し、実際の編集が完成したのは、昭和17年初め頃らしい。完成品の収録曲は、昭和16年の選曲案、60枚120面と数量は変わらないが、曲目は二割程度変更となっている。選曲は恐らく、民族音楽学者の田邊尚雄(1883-1984)と、民謡研究家の町田嘉章(1888—1981)が中心になって行われたものと推測される。

レコードは5巻、60枚(120面)からなり、雅楽、声明、能、琵琶音楽、尺八、箏、三味線、祭礼囃子、子守歌、わらべ歌、俚謡(民謡)と、日本音楽全般にわたりバランスよく収録している。また、当時の一流の演奏家が録音している点においても、この時代の日本音楽の実態を知る資料として、その価値は計り知れない。時代的には、日本が太平洋戦争に突入し、KBSの活動の性格も、次第に文化の相互交流や理解から、「大東亜」圏における日本の文化の優位性や政治的プロパガンダの宣揚に重点が移りつつあった時期である。この時期に、このような伝統音楽の良質な録音が制作されたことは、ある意味で驚きである。

このレコードは、現在、日本国内でも2~3カ所しか所蔵が知られていないが、今回翻刻のもとになったレコードは、日本や日本映画の研究で知られるドナルド・リチー氏(1924-2013)から、GHQのもと、日本国憲法の作成に関わったベアテ・シロタ・ゴードン女史(1923-2012)に贈られたものである。ベアテ女史の父君は、戦前、1928—1945年にかけて、東京音楽学校(現・東京藝術大学音楽学部)のピアノ科教授として多くの日本人ピアニストを育てたレオ・シロタ(1885-1965)である。今回、偶然、このレコードの現在の所蔵者である、アルビター・レコードのアラン・エヴァンス氏から2006年秋に解説の依頼を受けて、このような歴史的遺産の復刻のお手伝いをできることは

大きな喜びである。ただし、シロタ氏旧蔵セットには第5巻10枚目（佐渡おけさ、三階節、磯節、大漁節）が欠けていたため、この4曲については東京の国立劇場のご好意により、同劇場所蔵の「田邊尚雄コレクション」中のセットから補った。奇しくも、このレコードの編集者の一人であった田邊尚雄氏旧蔵資料をもってこのシリーズの復刻が完結したことは喜ばしい。制作の当初の趣旨を鑑み、解説は日英二カ国語とした。70年前の貴重な録音資料がこのようによみがえることにより、戦前の日本の音楽文化と文化交流事業の実態が少しでも明らかになれば幸いである。

なお、このCDシリーズの復刻は、2007年度（財）ローム・ミュージック・ファンデーションの助成を受けている。

備考：国際文化振興会の理念や活動全般については、芝崎厚士『近代日本と国際文化交流：国際文化振興会の創設と展開』（有信堂、1999）、酒井健太郎「国際文化振興会の対外文化事業：芸能・音楽用いた事業に注目して」『総力戦と音楽文化：音と声の戦争』（青弓社 2008,127-158）などを参照されたい。

俚謡（民謡）

「俚謡」は、今日では「民謡」と呼ばれる、さまざまな地域で伝承される民衆の歌謡である。ことばとしては「俚謡」のほうが古く、田舎風の歌、民間で歌われている歌、の意で広く用いられていた。ほとんどの楽曲は作曲、作詞者名が不明であること、プロでない一般の人々が伝承していることが特徴である。一方「民謡」ということばは「俚謡」に代わるものとしてすでに明治中期に登場し、大正ころからは北原白秋らが起こした新しい民謡「新民謡」が現れるに至った。「新民謡」は作者が明らかである点で、従来の俚謡／民謡と大きく異なる。しかしながら、「民謡」「新民謡」ということばが現れて以降も一般には「俚謡」ということばの方が流通していた。このKBSレコードも「俚謡」と表記している。「民謡」が一般的になるのは、第二次大戦以降のことである。

第5巻に収録されているのは日本本土の「俚謡」で、第4巻には沖縄諸島の宮古地方と八重山地方の「俚謡」4曲が収録されている。地方に特徴的な産業や生活形態と深く結びついた豊かな歌の世界が収録されている。

なお、このKBS『日本音楽集』の編者の一人に町田嘉章が含まれていることは前述の通りであるが、同時期に町田は『日本民謡レコード』（日本民謡レコード頒布会、1940年）というレコードを発行している。このレコードは三輯に分かれ、一輯あたり10枚、計30枚のレコードである。レコードには175頁に上る解説書『日本民謡集成』が付いており、それによれば、このレコードは町田の所蔵する日本各地の民謡録音盤から300曲を転写収録したもの、という。KBSレコード第5巻と一部収録曲が重なる。これら、20世紀前半の民謡収集の努力は、戦後日本放送出版から出版された『日本民謡大観』（九州以北の民謡の五線譜と解説、全9巻、日本放送協会編、1944-1980）へと結実した。近年、このオリジナル音源（CD）つきの復刻版も出ている（日本放送協会編、1992-1994）。

今回第5巻の復刻にあたり、KBSレコードと『日本民謡レコード』または『日本民謡大観』と歌詞、収録地が同じ場合は、同一の録音と考え、『日本民謡レコード』『日本民謡大観』のデータを参考にし、演唱者、録音年、説明の記述などを補った。また、国際文化振興会は1949年に『日本音楽集 Album of Japanese Music』をもとに、その抄録盤（20枚40面）を作っているが、その英文解説（Notes on Japanese music with special reference to the Album of Japanese Music, compiled by Kokusai Bunka Shinkokai, 1953）からも一部記述を補った。

なお、以下の各曲解説の歌詞で、カタカナ部分はハヤシ詞または母音の産み字である。また[]内に表記されている部分は、主唱者以外のその他の人々によるカケ声である。

1. 田植唄（群馬県）、籾摺唄（秋田県）

主食である米にまつわる歌は、労働歌という以上に、豊穰への祈りが込められた一種の宗教的な歌謡と言える。稲作に関する儀礼には、豊穰を予祝する田遊び、実際の田植えを囃す囃子田、それらがさらに芸術的に発展した田楽などがあるが、これらの儀礼や歌は、戦後の高度経済成長のころから急速に廃れ始めた。しかし、この録音が行われた昭和初期、すでに明治以来の集団の田植えが次第に少なくなりつつあることが町田嘉章の解説では指摘されている。ここに収録されている〈田植唄〉は、群馬県の桂萱（かいがや）村（現・前橋市上泉町桂萱）の例で、収録された昭和初期当時、桂萱村は他の地域では廃れてしまった風俗習慣をよく残している地域として知られていたらしい。

〈籾摺唄〉は米を脱穀する時に唄われる歌。この録音は、秋田県の南部、由利郡金浦町（現・にかほ市金浦）で収録されたもの。

田植唄（群馬県）

今日の日のエ 時 [ヨイ] 打つ鐘は [ア カナカナ]
イヤハノ いくつ打つ エ カナカナ イヤハノ [ヨイ]
七つもエ 八つもエ [ヨ ソウトモ] イヤハノ 九つも

籾摺唄（秋田県）

ハ 臼引き頼むにや ばんばとこたのば エ ばんばも [ホイ] 若い時 なんぼよかる エ
ハ 今年上作（じょさく）だよ 田の稲見たか エ 丈は [ホイ] 五尺で 穂は三尺 エ
ハ 米はたくさん はかり尽くされぬ エ 俵 [ソレ] たてて 身ではかる エ

2. 田植唄（広島県）、餅搗唄（島根県）

広島県には、歌、太鼓、笛、鉦などによって盛大に田植をはやす「囃子田」とよばれる芸能が広く分布している。この演唱は、広島県の東部・比婆郡比和町（現・庄原市比和町）のもの。「サゲ」と呼ばれる男性の音頭取りと、田植えをする早乙女の女性たちとの掛け合い形式で歌われる。両者は時に

重なることがあり、音楽的に高度に複雑な構造を示している。

〈餅搗唄〉は、餅を搗く時に歌う。この演唱は、島根県那賀郡江津町（現・江津市江津町）で収録されたもの。

田植唄（広島県）

（歌詞不明）

餅搗唄（島根県）

庭にゃ餅つく 表にゃ碁打つ

さまの ヤーレ 床の間で 金よ（かによ）はかる ヤンサヨ ホイ ヤンサヨ

今の唄うらりしゃんともどせ

さまの ヤーレ 床の間で 金よはかる ヤンサヨ ホイ ヤンサヨ

もうだんなさん いつ来て 出ても

あかね ヤーレ 床の間で 金よはかる ヤンサヨ

3. ホーハイ節（青森県）、津軽山唄（青森県）

〈ホーハイ節〉は青森県の津軽地方の民謡で、裏声を使った「ホーハイ」というハヤシ言葉に特徴がある。婚礼の時などに歌われる。この演唱は、青森市で収録されたもの。

〈津軽山唄〉も青森県、津軽地方の民謡である。もとは、女性が野に野菜や薪を取りに行く時に歌われたが、次第に祭りや宴会で歌われるようになり、それと同時に、音楽的にも洗練されていった。この録音には、現在、津軽山唄として知られている「ヤアイディ、十五七がやい、沢をのぼるに笛吹けば、峰の小松がみななびく」とは別の、青森市浪岡付近にまつわる歌詞で歌われている。

ホーハイ節（青森県）

ばばの腰や ホーハイ ホーハイ ホーハイ 曲 ホ がった ナイ 曲がった腰や治らぬ

愛宕山 ホーハイ ホーハイ ホーハイ どう ホ けりゃ ナイ 賀田（よしだ）町や長げよ

お玉家（おだまえ）くわ ホーハイ ホーハイ ホーハイ ど ホ こだ ナイ お玉家くわここだ

津軽山唄（青森県）

イヤデヤ 浪岡 浪岡が ヤイ

銀杏（ぎんによ）林の 銀杏（いちよう）の 銀杏の木は ヤイ

4. 麦打唄（千葉県）、麦搗唄（福島県）

ここでは千葉県匝瑳郡豊畑村の〈麦打唄〉が収録されている。女性二人が交互に歌う。男性によるかけ声も入っている。『日本民謡大観』関東篇には匝瑳郡豊畑村の〈麦打唄〉として、本演唱と同一と

思われる楽譜が掲載されており、演唱者は「椎名トヨ、桑田キヨの二名」と書かれている。

〈麦搗唄〉は、福島県相馬郡真野村の例。演唱者不明。

麦打唄（千葉県）

オヤ 東金茂右衛門の ナーナーヨ [オイ] 嫁はどこから
オヤ 岡浜尋ねて ナーナーヨ [オイ] 無くて江戸から
オヤ 江戸江戸本所の ナーナーヨ [オイ] 茶屋の小娘
オヤ 菅買って笠縫って ナーナーヨ [オイ] 嫁の日笠に
オヤ その笠かぶりて ナーナーヨ [オイ] 野良の草取り
オヤ ござが西国 ナーナーヨ [オイ] 長の旅する
オヤ あとではおかちゃんが ナーナーヨ [オイ] お茶の水汲む

麦搗唄（福島県）

麦も搗けたし ナーナーヤリ 寝頃も来たし
うちの親達や ナーナーヤリ アノサ寝る寝ると
麦を搗くなら ナーナーヤリ 七臼（ななから）八臼（やから）
三臼（みから）四臼（よから）は ナーナーヤリ アノサ誰も搗く

5. 酒屋唄（広島県）、茶作り唄（茶摘唄、茶もみ唄）（静岡県）

酒作りには、さまざまな工程があり、ここに収録されている〈酛摺（もとすり）唄〉とは、蒸し上がった米に麴と水を加え、櫂で攪拌する「酛摺」の時に歌われるものである。この演唱は広島県の西條（現・東広島市）で収録されたもの。音頭と一同によって歌われる。

一方、静岡は古くから茶の産地として知られている。茶にも、茶の葉を摘む「茶摘み」、積んだ葉を揉んで丸める「茶もみ」などいくつかの工程があり、それぞれ作業中に歌が歌われる。ここには〈茶摘唄〉と〈茶もみ唄〉が収録されている。

酒屋唄（酛摺唄）

エ 青いヨ 松葉も ノヨ アラヨイナーヨイヤナー
ア 心底（しんてい）を ヤレ 見やなれ ヨホエ ハ 枯れて エヨエ 落ちてても
ノヨエ 落ちてても ノヨエ ヤレ 二人づれ ヤレサノエ ションガエ
ア うぐいすが梅のヨ 小枝にや乗るよ ヨイヤナーヨイヤナー
ア ちょいと昼寝して ヨホエ ハ 花の ヨホエ 散るところ
ノヨエ 散るところ ヨエヤレ 夢にや見た ヤレサノエ ションガエ

茶作り唄（茶摘唄）

ア 広い茶原にお茶摘み アラ 揃い ヨ [ヤレソイトソウダエ]
茜 エ だすきにヨ [あかねだすきにどうしたね] ア だすきに ヨイナ 菅のかさ
茶作り唄 (茶もみ唄)
ア 駿河で ア 自慢のものはよ [ア ソラソラヨ] ア 富士のお山に茶の香り

6. 紙漉唄 (福井県)、漆掻唄 (福井県)、紅花摘唄 (山形県)

福井県は古くから和紙と漆の生産地として名高い。〈紙漉唄〉は、福井県今立郡岡本村 (現・越前市友定町) のもので、『日本民謡レコード』『日本民謡大観』の演唱と同じと考えられる。『日本民謡レコード』の解説書によれば、収録は昭和 14 (1939) 年、演唱者は「瀧ふい、石川とめさん達」とある。〈漆掻唄〉は福井県今立郡河和田村 (現・鯖江市河和田町) のもの。山形県は染料の紅花栽培で有名であるが、〈紅花摘唄〉は花を摘む時に歌われる。

紙漉唄 (福井県)

五箇で太政官でご禁札御用じゃ 笠をのがんせ木戸の内
五箇へ生まれて紙すき習うて 横座弁慶で人廻す
紙を習いにご主人さんに お損かけたがいつ忘りよ
七つ八つから紙すき習うて 練りの合加減まだ知らぬ

漆掻唄 (福井県)

漆掻さんあげたいものは 竹のはしごに檜笠
かわい子も置き 女房も置いて 行くは河和田の漆かき
雨が降りゃ寝る 照りゃ木の陰に 漆たまらにゃ水まぜる
漆かきさん 旅路の寝言 待つ子かわいや 国の妻

紅花摘唄 (山形県)

千歳山から ナ 紅花 (こうか) の種蒔いたよ [ハ シャンシャン]
それで山形 花だらけ [サアサ 摘ましゃれ 摘ましゃれ]
夜明け前だに ナ 紅花 (べにはな) 摘みのヨ [ハ シャンシャン]
歌に浮かれて 飛ぶひばり [サアサ 摘ましゃれ 摘ましゃれ]

7. 綿ほかし唄 (山梨県)、糸紡ぎ唄 (山梨県)、座繰唄 (山梨県)、機織唄 (埼玉県)

「綿ほかし」とは「綿打ち」とも言い、「綿弓」という道具で綿を打って柔らかくし、不純物を除く作業である。この演唱は山梨県中巨摩郡三恵村 (現・南アルプス市加賀美) で収録された。『日本民謡レコード』『日本民謡大観』と同じ内藤庄太郎の演唱と思われる (昭和 14=1939 年 5 月の収録)。

〈糸紡ぎ唄〉は、とった綿から木綿糸を紡ぐ時に歌われる。同じく中巨摩郡の内藤庄太郎の演唱。

〈座繰唄〉とは、「糸とり唄」「糸挽き唄」「手繰唄」「糸繰唄」など、地方ごとにさまざまな名称があるが、いずれも蚕の繭から糸を取り出す時に歌われる。『日本民謡レコード』『日本民謡大観』と同じ、山梨県南都留郡河口村（現・南都留郡富士河口湖町）の西村しげ等の演唱（昭和 14=1939 年 3 月収録）と思われる。

〈機織唄〉は、紡いだ糸を布に織る時に歌われる。この演唱は埼玉県入間郡豊岡町（現・入間市豊岡）で収録された。

綿ほかし唄（山梨県）

ゾクヨーリヤコラナ ゾクヨー ほかし屋身上知れたもの 弓一分 籠二朱 槌が三百 槌が三百
ゾクヨーリヤコラナ ゾクヨー 毎日ひにちうつ綿を （以下不明）

糸紡ぎ唄（山梨県）

ア ナンダ ナンダ ナンダヨウ 所は ア 小夜の中山のエ
飴の餅や売るよな 殿に添いたい 殿と添いたい
チョイ ナンダ ナンダ ナンダ 行灯消せや 鍵をかけるエ
西村のやすの 唄の声する

座繰唄（山梨県）

[ホイドッコイ] わしとあなた蚕のようにね [ドッコイ ドッコイ]
筵住まいで 桑で良いですよ [ドッコイ ドッコイ]
へら板直して 七子の羽織ね [ドッコイ ドッコイ]
主さんは何寸 召すだやら [ドッコイ ドッコイ]
桁丈揃えて 重ねて着せてね [ドッコイ ドッコイ]
主をやりたい検査場（けんさば）へよ [ドッコイ ドッコイ]

機織唄（埼玉県）

機が織れない 機神さまよ [ハイヨイ] どうかこの手の上がるように [ハイヨ]
扇町屋の機屋の縞は [ハイヨイ] あいご縦格子（たてごうし）に子持ち縞 [ハイヨ]
門（かど）に橘 格子に牡丹 [ハイヨ] うちの様子を菊の花 [ハイヨ]

8. かくま刈り唄（山形県）、筏乗唄（奈良県）

「かくま刈」とは、薪にする雑木を切り集める作業で、この時歌うのが〈かくま刈り唄〉。演唱は、『日本民謡大観』と同じ、山形県山形市の加藤桃菊と思われる。

〈筏乗唄〉は奈良県吉野郡下北山村で、昭和 12（1937）年に 4 月に収録されたもの。演唱は、『日本民謡レコード』と同じ、栗本音八ほかと思われる。二人で掛け合って歌う。

かくま刈り唄（山形県）

ハ 山でがさがさ 狐かたぬぎ 何のきつねだべ ハ かくま刈り かくま刈り

ハ 山は深いし かくまは伸びた お山繁盛と ハ からす鳴く からす鳴く

筏乗唄（奈良県）

ハ 下等（げら）の殿さん 筏の先生ヨ [コラショイ]

*神護（じご）や *音乗り 乗り落とす ヨ

ハ 筏にゃヨ 先生ヨ [コラショイ] じごや音乗り 乗り落とすヨ

[コラショイ しっかり漕げ漕げ]

清き流れの 北山ヨ 川でヨ [コラショイ] 筏乗りすりゃ 気張れるヨ

ハ 北山ヨ 川でヨ 筏乗りすりゃ 気張れるヨ [ハ しっかり漕げ漕げ]

(*神護、音乗り=北山川の難所の地名)

9. 地衝唄（栃木県）、長持唄（秋田県）

〈地衝唄〉は、道路や土地を衝き固める作業の時に歌われる。この演唱は、栃木県河内郡篠井村（現・宇都宮市篠井）で収録されたもの。

〈長持唄〉は、婚礼で花嫁の嫁入り道具を入れる長持ちをかつぎながら歌う道中歌。めでたい歌詞を歌う。この録音は、秋田県秋田市の収録。『日本民謡大観』と同一の録音とにすれば、1941年5月17日秋田放送局で録音（演唱：伊藤観誠）されたものか。

地衝唄（栃木県）

伊勢は ナエ 津でもつ 津は伊勢でもつ 尾張名古屋は ヤンレ 城でもつ

[ハラ ヨトコセ ヨーイヤナ ハラセ コリヤセ ササナンデモセ]

ここは ナエ 大事な大黒 エ 柱 カエ 合わせて ヤンレ 頼みます

[ハラ ヨトコセ ヨイヤナ ハラセ コリヤセ ササナンデモセ]

長持唄（秋田県）

めでた ナ めでたの [ハ ヤレヤレ] 若松さまよ 枝も ナ 栄える オヤ 葉も繁る ナエ

門に ナ 門松よ [ハ ヤレヤレ] 祝いの柳 かどの ナ 芥子はよ オヤ 福招く ナエ

10. 南部牛方唄（岩手県）、南部馬方唄（岩手県）

〈南部牛方唄〉は荷物運搬の牛追いの歌。岩手県下閉伊郡で収録。〈南部馬方唄〉は馬を曳く時の歌。岩手県盛岡市で収録。『日本民謡レコード』で「南部牛方節」を歌っている星川萬蔵の演唱か（昭和12=1937年9月の収録）。

南部牛方唄（岩手県）

あるけ こぶちやよ サハエ うがべり遅い サア ホイ ハイハイ パパア
向（むけ）の長嶺で サハエ 日が暮れる コラ サンサエ（台詞）
小川（こがわ）出っ時や [サー] 牡牛べえりぼってんがナ ホイ ハイハイ パパア
町村 沢口で サハエ 牡牛三つめんね ホイ ハイハイ パパア
塚の沢下りや サ 岩洞（がんべ）の宿でナ ホイ ハイハイ パパア
牛方賄い（まかね）に ナホイ 薄粥（ゆるべ）鍋掛けったがナ ホイ ハイハイ パパア（台詞）

南部馬方唄（岩手県）

アアアア 南部片富士 サエ 裾野の原はイト ハイハイ
アアアア 西も エ 東も ア 馬 エ ばかりト ハイハイ

11. 石刀節（秋田県）、南部木挽唄（岩手県）

〈石刀節〉は鉾山で鉾石を掘る時に歌われる。全国にあるが、ここに収録されているのは、秋田県鹿角市の尾去沢鉾山にまつわる歌。

〈木挽唄〉は、山で切り倒された木を山小屋などで製材する時の歌。ここには岩手県盛岡市の〈木挽唄〉が収録されている。実際に木挽きの作業をしながら演唱されている。

石刀節（秋田県）

ハア 向こう通るは 坑夫さんじゃないか かねがこぼれる袂から
ハア 押せや押せ押せ 下の関までも 押せば港に近くなる
ハア 黄金花咲く 尾去沢の山 掘れば掘る程 黄金ゃ出る

南部木挽唄（岩手県）

ハア 山は新山（あらやま） 木は大木（たいぼく）よ エ ア 親方繁盛と鳴り響くよ
ハア わたしゃ南部の ア 奥山育ちよ ハ 清き流れで顔洗う

12. 松前追分（松前、北海道）

松前は、近世、日本本州と蝦夷と呼ばれた北海道の間の交易の中継地として栄えた北海道南部の町。「追分(追分節)」は、中山道と北国街道の分岐点付近で生まれ、新潟などを經由して、北海道まで伝わったとされ、〈越後追分〉〈江差追分〉などさまざまな派生がある。〈松前追分〉は松前付近の風俗を歌ったもの。シラブルを長く延ばし、豊かな装飾音（コブシ）を加える歌唱法に特徴がある。

松前の 岡の立石堂（たてしど）の坂で ホ口と泣いたり 泣かせたり

13. 鯉漁の唄（小樽、北海道）

北海道の小樽で収録された、ニシン漁の時の労働歌。〈網起し木遣〉、〈沖揚音頭〉、〈数ノ子タタキ唄〉の三つから成る。〈網起し木遣〉は大漁の時、網を引く動作を描えるために歌われる。はじめにかけ声の部分がある。網から船に魚を移す時に歌われるのが〈沖揚音頭〉。この歌は、現在〈ソーラン節〉として全国的に知られている。網から魚が取り去られたあと、網はまだ数の子で重い。網は浜辺に引き上げられ、老人、子供、女性によって数の子取りが行われる。〈数ノ子タタキ唄〉は、この時に歌われる。

網起し木遣

トト トットコシド [エ] ヨイヤサ [エ ヨイヤサ]
ヨイソラ [ソラ エイヤ ハラハラドッコイ ヨイトコ ヨイトコナ]
コラエ 松前さまは ヤエ [ヤートコセー ヨーイヤナ]
ソラ 松前さまは 船（ふな）の神じゃ ヨーイトナ
[ソラ エンヤ ハラハラドッコイ ヨイトコ ヨイトコナ]
コラエ このあみ起せば ヤエ [ヤートコセー ヨーイヤナ]
ソラ この網起せば 千両万両だ ヨーイトナ
[ソラ エンヤ アリヤ ドッコイ ヨイトコ ヨイトコナ]

沖揚音頭

[ドッコイショ ハ ドッコイショ ドッコイショ]
イヤレ ソーラン ソーラン ソーラン ソーラン ソーラン
おまえ行くなら わしゃどこまでも 蝦夷が千島の果てまでも チョイ
[ヤサ エンヤ サ ドッコイショ ハ ドッコイショ ドッコイショ]
イヤレ ソーラン ソーラン ソーラン ソーラン ソーラン
遠く離れて 会いたい時は 月が鏡になればよい チョイ
[ヤサ エンヤ サ ドッコイショ ハ ドッコイショ ドッコイショ]

数ノ子タタキ唄

ハ ヨイ ヨイ [ヨイ ヨイ ヨイ アリヤリヤン コリヤリヤン ヨーイトナ]
沖のカモメが もの言うならば [ハー イヤサカ サッサ]
便り聞いたりの一 聞かせたり
[ソリヤ 聞かせたり 聞いたりの一 聞かせたり]
[ヨーイ ヨーイ ヨイ ヨイ ヨイ アリヤリヤン コリヤリヤン ヨーイトナ]

14. 大漁唄い込み（宮城県）

宮城県や岩手県では、漁から港に戻る時、大漁であれば歌いながら戻る「唄い込み」という習慣がある。陸で待っている者は、この歌で大漁であることを知る。「唄い込み」は〈お祝い〉〈斎太郎節〉〈渡島甚句〉の3つの歌から成る。〈お祝い〉は、新年、新しい船の完成、大漁の時などに歌われる。この歌は、もとは北日本に広く分布する祝い歌で、漁とは関係がなかった。〈斎太郎節〉は、次のような伝承を持っている。伊達藩の鍛冶屋のふいご吹き斎太郎は、遠島に流されるが、美声であったため、そこでふいご吹きの歌の歌詞を、漁師の船漕ぎ歌に置き換えて広めた。音頭による独唱のうしろで、囃し手が「エンヤトット」と歌い続け、リズムをとっている。『日本民謡レコード』と同一の演唱とすると、採集は昭和12(1937)年7月、演唱は後藤桃水率いる宮城民謡団の八木寿水、松本木兆らである。〈渡島甚句〉は、もとは気仙沼村の室内の余興歌であったが、漁師の船漕ぎ歌に取り入れられた。

お祝い

ご オ ホーイ いわ ハ い しげければ

ハトヨ ヨホホエ おつぼの松は ヨホイ ヨ そよめく トヨ

斎太郎節

松島の サヨ 瑞巖寺ほどの 寺はない トエ [アレハ エエト ソーリヤ 大漁だ エ]

前は海 サヨ 後ろは山で 小松原 ダエ [アレハ エエト ソーリヤ 大漁だ エ]

渡島甚句

ハア 押せや押せ押せ ア 二丁艫(にちよる)で押せや 押せば港が アリヤサ 近くなる

南風(みなみ)吹かせて ホラ 舟下らして もとの千石 アリヤサ 積ませたい

15. 盆踊唄(大の坂)(新潟県)

魚沼郡(現・魚沼市)堀ノ内町で収録された盆踊唄。笛と鼓の伴奏が付いている。

大の坂(だいのさか) ヤレ 七曲がり 駒を [ハ ヤレソリヤ よく召せ旦那様]

よく召せ駒を 南無西方 [よく召せ 旦那様]

三歳 ヤレ 鹿毛(かげ)の駒 江戸で [ハ ヤレソリヤ 値がする八両する]

値がする江戸で 南無西方 [値がする八両する]

16. 盆踊唄(八木節)(栃木県)

〈八木節〉は、群馬県、栃木県に分布する盆踊唄。この録音は栃木県足利郡山辺村(現・足利市堀込町山辺)で収録。笛と太鼓の伴奏が付く。歌詞には、群馬出身の侠客・国定忠治の名も出てくる。

ハ 頃は弘化の三年九月 秋の半ばに大小屋かけて

夜も昼間も分ちはなくて 勝負勝負で其の日を送る 人も羨む大貸し元よ
月に群雲花には嵐 とかく浮き世は障りがありて

八 ある日親分忠治をはじめ 二人ばかりの子分をつれて
鹿沢 (かざわ) 村へと来かかる途中 のどが乾くと立ち寄る茶店
茶飲み話にはからず聞いた いとも哀れな話がござる
八 土地の代官赤塚軍次 世にもまれなる悪役人で
民を虐げ非道をなさる 庄屋勘助わずかなことで
罪もないのに牢屋の住まい 村の人々寄り集まりて

17. 庄内おばこ (山形県)、秋田おばこ (秋田県)

「おばこ」とは東北の方言で娘の意味。ここには山形県庄内地方と、秋田県仙北郡地方の例が収録されている。〈庄内おばこ〉は尺八と三味線の伴奏つき。〈秋田おばこ〉は三味線、笛、鼓の伴奏。

庄内おばこ (山形県)

おばこ来るかやと [ハ コリャコヤ] 田んぼのはんずれまで出てみたば [ハ コバエテ コバエテ]
おばこ来もせで [ハ コリャコヤ] 用のない煙草売りなどふれて来る [ハ コバエテ コバエテ]
おばこ心持ち [ハ コリャコヤ] 池の端の蓮の葉のたまり水 [ハ コバエテ コバエテ]
少しさわるてど [ハ コリャコヤ] こるこる転んでそば落ちる [ハ コバエテ コバエテ]

秋田おばこ (秋田県)

おばこ何ぼになる この年暮らせば 十と七つ
十七 おばこなど 何して花こなど 咲かねどナ

18. 相馬流れ山 (福島県)、津軽よされ (青森県)

〈相馬流れ山〉は、福島県相馬地方の馬を追う神事・相馬野馬追の時に歌われる。

〈津軽よされ節〉は、青森県津軽地方で歌われる民謡。三味線、太鼓でにぎやかに囃して歌われる。

「よされ節」は、青森県の黒石、岩手県の南部、雫石、秋田県、北海道、新潟県などにも伝わっていて、その土地を詠み込んだ歌詞が作られている。この演唱には、のちの「津軽三味線」へと通じる技巧的な三味線の伴奏がついている。

相馬流れ山 (福島県)

手綱さばきも ナアエ ナアエ ひときわ目立つ ナアエ
主の陣笠 ナアエ ナアエ サノサ 陣羽織 ナアエ

津軽よされ節 (青森県)

ハア なさけ深雪窓まで埋めた ハア どうぞ今宵は泊まりゃんせ
とろりととろ火が燃えて 鍋の鱈汁よう煮えた
ハア 足袋も瓜子(つまご)も干しましょう これほど言うのに帰るなら
わしが想いで雪解かし それにてさらに泊めてやる ヨサレ ソーラ ヨイヤー

19. 佐渡おけさ(新潟県)、三階節(新潟県)

「おけさ」とはもともと若い女性を指すことばとも、特定の女性の名前だとも言われている。以前は、「おけさ」という歌いだし(ハヤシことば)であったために、曲名が「おけさ」となっていたと言われているが、現在は、「ハ」ということばで歌いだす。佐渡の〈おけさ〉は陰旋法で、他地域の陽旋法のものとは異なる。この演唱には、三味線と太鼓の伴奏がつく。

〈三階節〉のルーツは新潟県柏崎とされている。もとは三味線の三下りで伴奏される盆踊り歌であったが、お座敷歌へと洗練されていった。このレコードでは、柏崎の芸者が歌っている。「ピッカラ チャッカラ ドンガラリン」は雷の音を模した音だが、この部分を三回繰り返すことから、「三回節」の名がついたとも言われている。

佐渡おけさ(新潟県)

ハ 佐渡へ [アリヤサ] 佐渡へと 草木もなびくよ [ハ アリヤアリヤアリヤサ]
佐渡は居よいか 住み良いか [ハ アリヤサ サッサ]
ハ 霞む [アリヤサ] 相川 夕日に暮れてよ [ハ アリヤアリヤアリヤサ]
波の綾織る 春日崎 [ハ アリヤサ サッサ]
ハ 真野の [アリヤサ] みささぎ 松風冴えてよ [ハ アリヤ アリヤ アリヤ サ]
袖に涙の むら時雨 [ハ アリヤ サ サッサ]

三階節(新潟県)

ハア 米山さんから雲が出た 今に夕立が来るやら
ピッカラ チャッカラ ドンガラリンと 音がする
ハア ドンガラリンと音がする 今に夕立がくるやら
ピッカラ チャッカラ ドンガラリンと 音がする

20. 磯節(茨城県)、大漁節(千葉県)

〈磯節〉は、茨城県那珂川の河口付近の港町の遊郭で発展した歌。江戸時代の船漕ぎ唄を、1890年代に芸者置屋の主人・矢吹万助が現在のよう形にした。盲目の歌い手・関根安中がリコードに吹き込むなどして、有名になった。この演唱には三味線と太鼓の伴奏がつく。

〈大漁節〉は、大漁の時に歌われ、全国各地にあるが、幕末に千葉の銚子で作られたものが有名に

なった。三人の網元が数え唄形式の歌詞を10番まで作り、常磐津師匠の遊蝶が作曲したという。このレコードには、一番から三番までが収録されている。三味線、小鼓、太鼓笛、カネの伴奏つき。

磯節（茨城県）

[ハ セヤ セヤ セヤ セヤ イササカ リンリン ハセシャ ドンドン ハーサイショネ]

磯で名所は 大洗様よ [ハーサイショネ]

松が見えます ほのぼのと [オヤ マツガネ] 見えます 磯ほのぼのと

[ハ セヤ セヤ セヤ セヤ イササカ リンリン ハセシャ ドンドン ハーサイショネ]

大漁節（千葉県）

一つとせ 一番ずつに積み立てて 川口押し込む大矢声 この大漁船

二つとせ 二葉の沖から外川（とかわ）まで 続いて寄り来るおお鯛 この大漁船

三つとせ みな一同にまねをあげ 通わせ船のにぎやかさ この大漁船

21. 木曾節（長野県）、伊奈節（長野県）

長野県の南部には、伊奈谷、木曾谷という二つの谷がある。〈木曾節〉〈伊奈節〉は明治時代に東京に紹介されて一躍有名になったが、それ以前は、〈木曾節〉は「木曾のなかのりさん」（単に「なかのりさん」とも）、〈伊那節〉は「御岳さん」（または「御岳節」）と呼ばれていた。

この〈木曾節〉の演唱は、木曾福島の代表的な歌手・牛島二郎と囃子方の人によるもの。三味線と太鼓の伴奏がついている。ハヤシことばをのぞき、歌詞は一般に知られているものとは異なる（作詞者は不詳）。

〈伊奈節〉の方が古く、もとは祝いごとや夏祭りの折に木曾、伊奈両地方で歌われていた。山岳信仰と結びついてきたが、次第に娯楽の踊り歌となった。歌の冒頭の「ヨサコイ アバヨ」は、江戸時代、伊奈から木曾へ米を運んだ馬子唄の挨拶のことばが取り入れられたもの、と言われる。この演唱は伊奈の芸者によるもので、三味線と太鼓の伴奏がついている。

木曾節（長野県）

木曾のな なかのりさん 木曾の名所は ナンジャラホイ [かけはし寝覚め ヨイ ヨイ ヨイ]

山でな なかのりさん 山で高いのは ナンジャラホイ [御岳さん ヨイ ヨイ ヨイ]

心な なかのりさん 心細いよ ナンジャラホイ [木曾路の旅は ヨイ ヨイ ヨイ]

笠にな なかのりさん 笠に 木の葉が ナンジャラホイ [舞いかかる ヨイ ヨイ ヨイ]

伊那節（長野県）

[ヨサコイ アバヨ] ハア 東や天峡 西や駒ヶ岳 間（あい）を流るる 間を流るる 天竜川

[ヨサコイ アバヨ] ハア 桑の中から小唄が漏れる 小唄聴きたや 小唄聴きたや 顔見たや

22. 越中おはら節（富山県）、山中節（石川県）

〈越中おはら節〉は富山市八尾地域の民謡。「おわら風の盆」と呼ばれる盆踊りで歌われる。三味線、胡弓、太鼓の伴奏がつく。歌詞はきわめて種類が多い。

〈山中節〉は石川県の山中温泉の座敷唄。もとはこの地方の盆踊甚句であったとされる。三味線、尺八、胡弓の伴奏がついている。

越中おはら節（富山県）

[ソレヨ キタサヤス]

アイヤ 可愛や いつ来て見ても [エ ドッコイサノサ ションガエサノサ]

たすき投げやる オワラ 暇もない

山中節（石川県）

ハア 山が高うて山中見えぬ 山中恋しや山憎や

ハア 飛んで行きたいこおろぎ茶屋へ 恋の架け橋二人連れ

23. 安来節（島根県）、どっさり節（島根県）

〈安来節〉は、出雲地方の船歌の「出雲節」に由来する。この歌は、越後、佐渡に伝わり、伝播後、地域ごとに変化が生じ、名称も「わだみ節」「はまさだ節」「石橋節」などとさまざまになった。「安来節」もその一つ。安来港は砂鉄の積み出しでにぎわった港である。安来の「おいと」という歌手が1916年に上京してグラモフォン・レコードに録音し、また、寄席に出演して、この歌を有名にしたという。このレコードの演唱者は島根県仁摩町出身の芸者・浜田梅吉で、梅吉は1930年代に東京の浅草で活躍した。この演唱は、三味線、箏、鼓で伴奏されている。

〈どっさり節〉は島根県隠岐島でよく知られた歌。樵夫や漁師がよく歌い、宴会の余興では三味線、太鼓などで囃す。この歌にはエピソードがある。隠岐の知夫里島に住んでいたお松という娘は、ある日、越後から来た新左衛門と恋に落ちる。二人は幸せに暮らしたが、お松の故郷から親戚が彼女を連れ戻しに来る。お松は泣く泣く新左衛門と別れる時に、新左衛門から追分節を習う。その後、新左衛門から音沙汰はなく、悲しみを追分節にして歌ったが、完全に覚えていたわけではないので、どうにかしか歌えなかった。それで「どっさり節」になったという。「どっさり」とは地元の方言で「どうにか」という意味。音楽的には、この歌は越後の「追分節」ではなく、瞽女によって伝承されて来た「廣大寺」のほうが似ていると町田は解説している。

安来節（島根県）

お月様さえ 泥田の水で 浮きつ沈みつ世を渡る

どっさり節（島根県）

ア 忍び ナエ 出よとすりゃ ア 烏めがつける エ
まだ夜 エ も明けぬに エ かお エ かおと エサノエ
憎や コレワイ ドジャイナ 八幡（やわた）の ア チョイト 森烏 サノエ

24. 博多節（福岡県）、鹿児島小原良節（鹿児島県）

〈博多節〉のルーツは博多ではなく、島根県の石見地方とされる。石見では芸者や一般の人によって広く歌われている。「正調博多節」は後に生まれた歌で、オリジナルの素朴な風合いはなくなり、洗練されたものになっている。この演唱は、グラモフォンレコードに録音を多く遺した赤坂芸者の小梅である（福岡県出身）。三味線の伴奏つき。

一方、鹿児島〈小原良節〉もまた鹿児島ではなく、隣の宮崎県都城市安久（やっさ）で生まれたと言われている。1609年の島津氏の琉球攻めの時に安久の村人が歌っていたという伝承があるが真偽は不明。室内、野外などあらゆる機会に歌われる。お座敷などでは三味線が付く（調弦は三下り）。鹿児島生まれの新橋喜代三という芸者が1934年に「鹿児島おはら節」として録音し、全国に知られるようになった。このレコードでは赤坂小梅が演唱している。三味線、太鼓の伴奏付き。

博多節（福岡県）

博多帯締め 筑前絞り
筑前博多の帯を締め 歩む姿は柳 アリヤ ドッコイショ 腰
お月さんはちょっと出て 松の陰 ハイ コンバンハ

鹿児島小原良節（鹿児島県）

花は霧島 煙草は国分 燃えて上がるは オハラ ハ 桜島 ハ ヨイヨイヨイヤサット
見えた見えたよ 松原越しに 丸に十の字の オハラ ハ 帆が見えた ハ ヨイヨイヨイヤサット

©Naoko TERAUCHI, 2015